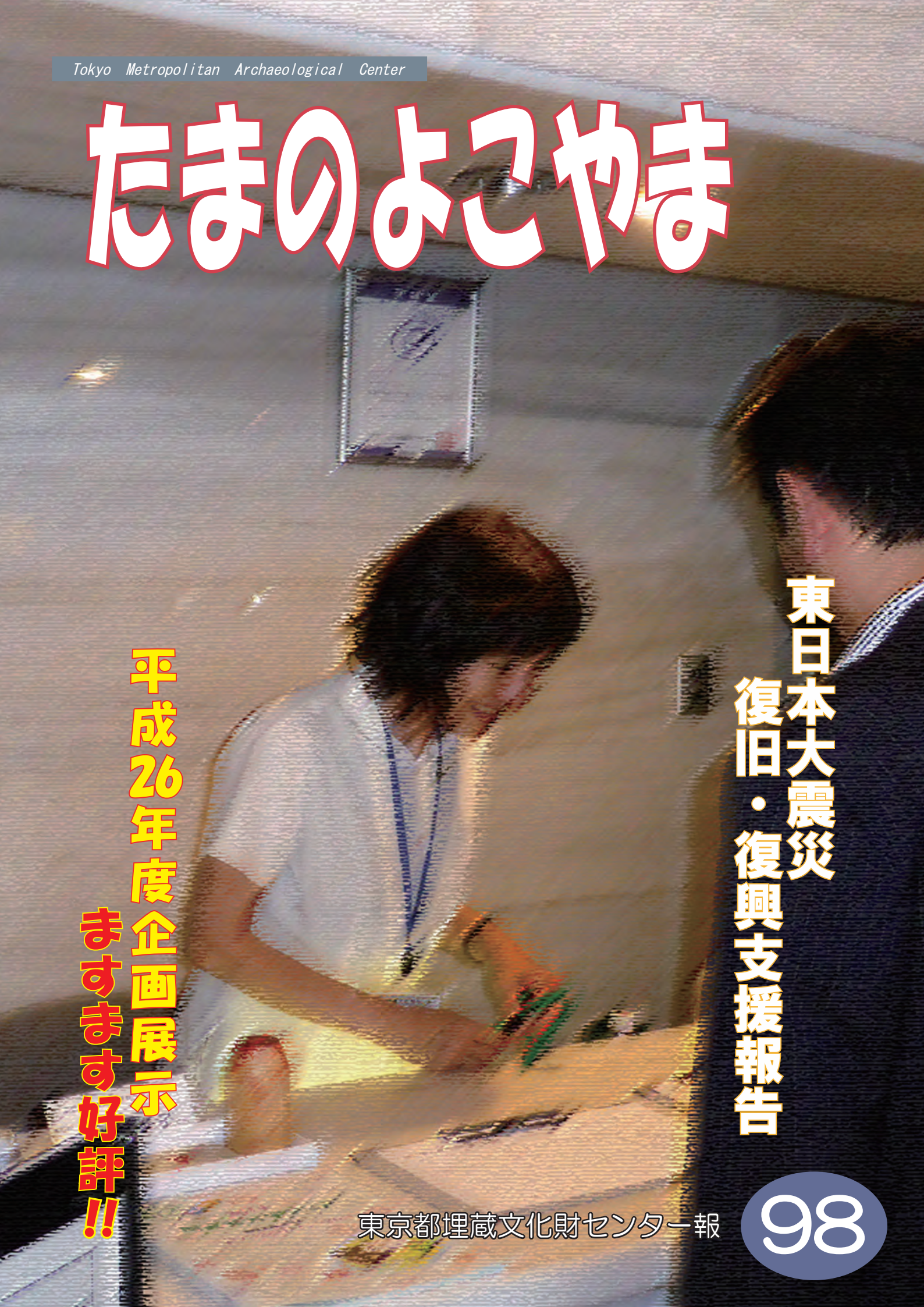
Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま



東日本大震災
復旧・復興支援報告

平成26年度企画展示
ますます好評!!

東京都埋蔵文化財センター報 98

特集　東日本大震災復旧・復興支援報告

昨年６月から今年３月まで（公財）福島県文化振興財団遺跡調査部の復興調査班へ配属され、相馬福島道路の霊山道路部分（伊達市・相馬市所在）の路線にかかる遺跡の本調査及び試掘調査を担当し、復興業務として調査の技術指導を行いました。

東日本大震災の復旧・復興へ向けた取り組みを支援するため、様々な分野の職員が全国から被災３県へ派遣されています。平成 25 年度に派遣された埋蔵文化財関係職員は全体で 60 名、そのうち福島県へ 14 名の職員が派遣されました。（公財）東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターからも、東京都教育委員会の支援を受け、昨年度から震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のため、福島県へ職員を派遣しています。

福島県は原発事故の深刻な影響がある厳しい状況の中、文化財の保護を図りながら、復興へ向けた取り組みがなされています。中でも一般国道 115 号相馬福島道路事業は復興支援事業として位置づけら

①相馬福島道路遺跡（平成 25 年度本調査対象遺跡）

れ、中通りの東北自動車道と浜通りの常磐自動車道とを東西に結ぶ 45km の自動車専用道路として計画され、被災地と内陸部の連携を強化し復興支援の進行が図られる事業として昨年度から本格化しました（図①）。

調査地は山間部や丘陵地に所在するため(写真②・③)、平らな場所が確保できず、調査地点も短期間で次々と移動することなどから、プレハブの設置ができないことが多く、また電気・ガス・水道などのインフラも確保できないなど、苦労することも多くありました。調査に協力していただいた地元の作業員の皆様には環境が整わないにもかかわらず、真夏の暑さや冬の積雪の中など厳しい中で作業していただいたことに大変感謝しています。

また、現場では常に線量計を携帯して記録し、適切な放射線量管理がされています。基準値の範囲内とはいえ、一部に放射線量の高い地域があり、原発事故による線量の問題を実感しました。

今回の派遣では、福島県の職員や他の府県からの派遣職員の皆さんと協力して仕事を進めることができ、改めてチームワークの大切さを学びました。

②行合道 B 遺跡全景

③川向遺跡北区全景

同左遺跡 1 号住居跡

今年も東京都と本事業団が実施した、青森から東京までの『未来への道　みちのくから、つながろう。Run & Ride to TOKYO 2014　1000km 縦断リレー』が行われました。筆者も福島地区のリレーに応募し、個人資格で参加する機会を得、元の派遣先の皆さんを始め多数の応援をいただき、次の走者へ無事に襷をつなぐことができました（写真④）。復興の道のりはまだまだ厳しいものがありますが、今後とも福島の皆さんとのつながりを大事にしていきたいと考えております。　（飯塚武司）

④（公財）福島県文化振興財団の皆さんの応援

遺跡だより 102

新宿区　市谷本村町遺跡（いちがやほんむらちょういせき）

所在地：新宿区市谷本村町 9-5
調査期間：2013 年 3 月～ 11 月
調査面積：３，１００㎡

市谷本村町遺跡（新宿区 No.61）は、JR 市ヶ谷駅と都営新宿線曙橋（あけぼのばし）を結ぶ靖国通りの北側に位置しています。遺跡は武蔵野台地東部の淀橋台の一角で、樹枝状に延びる谷に挟まれた台地にあります。台地を挟む谷は外堀から靖国通りに沿って遺跡の南側にあった旧紅葉川（もみじがわ）の谷筋と、同じく外堀から遺跡の北側に延びる長延寺谷（ちょうえんじだに）と呼ばれる谷筋です。現在のこの場所は主に防衛省の敷地となっていますが、江戸時代には尾張藩徳川家の上屋敷がありました。

遺跡を含む周辺は、明暦２（1656）年以前には板倉周防守（いたくらすおうのかみ）下屋敷などの大名や旗本などの屋敷がありました。尾張藩徳川家は、明暦２（1656）年に屋敷を拝領し、寛文３（1663）年に東側に拡張し、更に明和４（1767）年に西側を順次拡張していきました。明治時代になると、この地は陸軍士官学校、陸軍参謀（さんぼう）本部などと、変遷していきました。

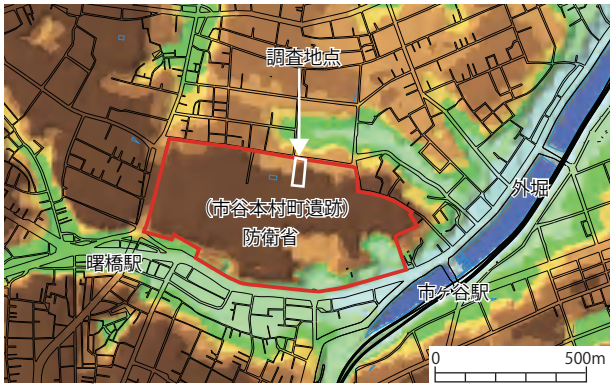
市谷本村町遺跡はこれまでに数多くの調査が行われていますが、今回の調査地点は、尾張藩徳川家の屋敷の北側中央付近あたりで、遺跡北側の長延寺谷から谷が延び、屋敷内の池につながる谷地形に該当します。

発掘調査の結果、江戸時代の尾張徳川家の屋敷内の遺構として、屋敷内を区画する石垣、石垣と土手（どて）状遺構でコの字形に区画した空間とその内側の礎石などの建物施設、石垣と石組溝・砂利敷の屋敷内の道、土坑群、石組溝、礎石・礎石跡、火災によるゴミを捨てた焼土溜（しょうどだめ）などが重層的に確認されました。

また下層には尾張藩が当該地に屋敷を拝領された際に谷を埋めた跡（埋（う）め立（た）て層）が見つかっています。

江戸時代の遺構群の上層からは、陸軍士官学校の建物基礎・石組溝・焼却炉・埋設された排水関係施設が検出されました。また関東大震災後に、池のあった場所に北側の道路から出入りできるようにした地下道も調査区を縦断するように見つかりました。

石垣と石組溝・砂利敷の屋敷内の道



遺跡の位置と周辺の地形（1/25000）

今回の発掘調査により、以下のようなことがわかりました。長延寺谷から屋敷内の池につながる埋没谷の旧地形とその埋め立ての様子が判明しました。調査地点で、江戸時代以降６ｍを超える埋め立てが行われており、各時期の遺構が新しい段階の遺構に壊されず残っていました。

屋敷内を区画する石垣や土手状遺構などが見つかり、絵図史料と一致することが判明し、具体的な構造が明らかになりました。地表面下８ｍ付近（北側の道路面から約２ｍ下）から、屋敷内の池の排水を長延寺谷に向かって行っていた石組溝が見つかりました。

（小林　裕）

埋め立て層の状況

屋敷内の池から長延寺谷に延びていた石組溝

あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.2

―東京国際フォーラム　丸の内三丁目遺跡（まるのうちさんちょうめいせき）　―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査前のと現在の写真を比べながら、調査後に遺跡の周辺がどのように変わったのかご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

前回の多摩丘陵から一転、今回は都心の千代田区丸の内、JR 有楽町駅の側に建つ、「東京国際フォーラム」（丸の内三丁目遺跡）をご紹介します。

丸の内三丁目遺跡は、新宿の副都心に東京都庁が移転した跡地で、平成４（1992）年に発掘調査が行われました。調査によって縄文時代、江戸時代の遺構・遺物が見つかっています。

注目されるのは、この遺跡から江戸時代の初期段階の遺構・遺物が発見されたことです。江戸の町は天正 18（1590）年、徳川家康の入府（にゅうふ）より段階的に整備されていきます。この遺跡からは、東京都埋蔵文化財センターが調査した江戸時代の遺跡の中でも特に古い段階の遺物が出土しており、当時の様子を伝えてくれる貴重な資料となっています。

その後、明治 22（1889）年に、江戸城幸橋（さいわいばし）門内から東京府庁舎がこの地に移転され、幾度の災害、戦災を乗り越え、新宿に移転するまで東京の行政の中心として機能していました。　（武内　啓）

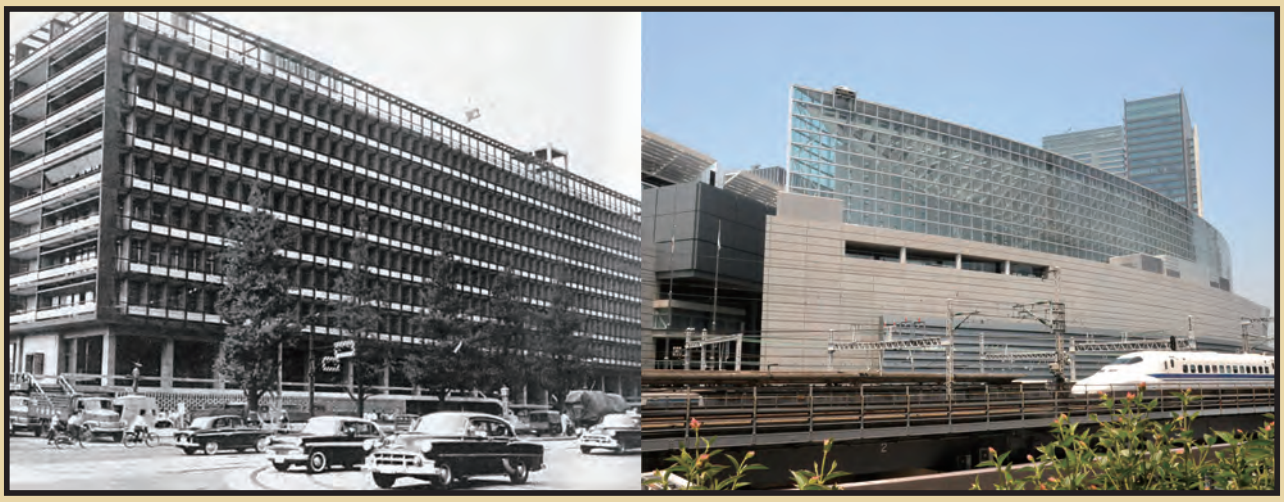


写真１：かつての東京都庁丸の内第一庁舎（左）の場所に建つ、東京国際フォーラム（右）。平成３（1991）年に東京都庁は現在の新宿庁舎に移転した。再開発により周辺の風景も大きく変わっている。

写真２：現在は展示場やイベントスペースとして、利用されている東京国際フォーラムであるが、その一角にかつて都庁があった名残が遺されている。左は丸の内庁舎前に置かれていた大田道灌の銅像。江戸開都 500 年を記念し、昭和 33(1958) 年に製作された。右は「東京府廳（庁）舎」の石碑。側面に「大正六年七月」の銘がある。植え込みの中でひっそりと、かつてここに都庁があったことを私達に伝えてくれている。

続 大江戸掘りもの帖～８～

火葬遺構にみる都市の周縁と拡大　～市谷薬王寺町遺跡の発掘調査から～

本紙 94 号の「遺跡だより 97」でご紹介した新宿区市谷薬王寺町遺跡・市谷柳町遺跡の調査報告書（当センター 298 集）が、去る７月に刊行されました。そこで今回は、市谷薬王寺町遺跡で発見された江戸時代の「火葬遺構」を取り上げます。

近世の江戸は百万を越す人口過密都市、千百余りもの寺院が存在したとされています。そのため遺跡として墓域が発掘されることも少なくありません。葬法は土葬が主体ですが江戸前期までは火葬の比率が３，４割を占める寺院もありました。出土の仕方は蔵骨器に納骨された状態が主で、火葬の場の痕跡（荼毘跡）となると、おそらく本例が初めての可能性が高いという点で注目しています。

発見された火葬遺構 611 号遺構（写真右）は長さ 120cm ほどの長楕円形で、内面は火を受けて固く焼け締まり、頭骨を含む焼骨が散乱していました。焼土は貼り付けられた粘土が変質したものと推測しています。わずかに残る焼骨の分析から、国立科学博物館の梶ヶ山真里さんは、被葬者として熟年男性の可能性をあげ、「軟部がついた状態で 800 度以上の高温で長時間焼かれた」と推定されています。ほかにも２体分の焼骨が周辺から出土したことから、ある時期には「荼毘所（火葬場）」であったものと解釈してよいと思われます。

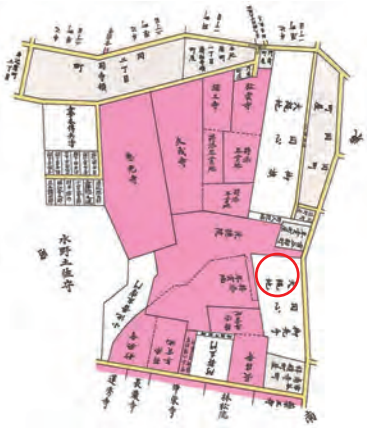
いつごろ造られたのでしょうか？　調査では江戸前期の可能性をあげています。遺構内から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果は、室町時代後半から江戸時代前期のアカマツかクロマツ材。年代幅はあるものの、発掘所見をおよそ裏付ける年代観です。

火葬遺構の焼土と焼骨のようす

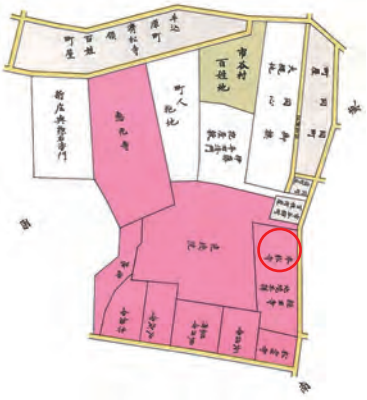
遺構のある場所は、幕末の嘉永５（1852）年段階（図左）では「御先手組同心大縄地」と武家地ですが、延宝年中（1673～81）（図右）では「本松寺」の文字が見られ、まだ百姓地の残る近郊と都市の交わる周縁的空間に、牛込南寺町と称される寺町が形成されたことが分かります。

新宿区の学芸員栩木真さんによると、寛永 13（1636）年の江戸城外堀普請に伴い御用地とされた寺院の集団移転があり、この時点では長期的な利用見込みのない都市周縁に移転させたが、明暦の大火（1657）により都市計画の見直しを余儀なくされ、都市拡大の過程でたびたび寺院が周縁へと追いやられていった、という背景があったようです。現外苑東通りの往還に面した本松寺もその例にもれず、再び天和３（1683）年には御用地となり、牛込高田（現新宿区喜久井町）へと移転しています。

火葬遺構が本松寺にかかわるならば、年代は 17 世紀前～後期に限定されます。この頃、江戸の墓制は転換期を迎え、江戸前期まで各寺院にあった荼毘所が減少し、独立した火葬場が江戸周縁につくられていく時期とされています。今回見つかった火葬遺構は、江戸前期の寺院内火葬の具体例を示す希少な事例であり、都市江戸の開発と拡大の過程を周縁から裏付けるものと言えます。（大八木謙司）



嘉永５（1852）年の頃



延宝年中（1673～81）の頃

『御府内場末往還其外沿革図書』
（新宿区教育委員会 1982『地図で見る新宿区の移り変わり牛込編』より）

【参考文献】栩木真 2001「発掘調査を通してみた文献史料」『地方史研究』No. 270、谷川章雄 2005『近世火葬墓の考古学的研究』

埋文センターを支える スタッフぅ～ VOL.2 受付の人たち

今回の「埋文センターを支えるスタッフぅ～」では、受付で働く人たちを紹介します。当センターの受付はＨさん、Ｉさん、Ｗさん、Ｓさんの４名が交代で業務に当たっています。

仕事の内容としては文字通り、センターの展示室や体験コーナーを訪れる来館者や研究者、それに関連業者の人たちの受付が第一にあげられます。業者や研究者の人たちには入館証を渡し、出入りの時間を記入してもらいます。一般の来館者については人数を数え、最後に業務日誌に記入して提出します。

展示ケースを清潔に保つ

館内には一般の来館者のために考古展示室や体験コーナーなどが設置されていますが、展示ケースや体験コーナーの器具の清掃・整頓なども重要な仕事のひとつです。

特に小学校の団体見学が集中する４～６月には、生徒たちが体験してやや乱雑になった縄文土器作成パズル、縄文クッキー作りのため粉々に飛び散ったドングリ片、試着のための縄文服などを、次のグループの生徒たちが最初から体験できるように、短時間のうちに掃除し整えておかなくてはなりません。

毎年５月の連休には「縄文わくわく体験まつり」という大イベントがあり、今年は 1400 名もの方々が参加されましたが、その際は館内も連日大勢の来館者がありました。受付・案内のほうも大忙しで、

試着した縄文服を整える

ベテランのＨさんやＩさんなどは嬉しい悲鳴をあげていました。ちなみに、受付の４名に共通する願いは、平日や雨天日にももっと多くの来館者があればいいなあ、ということだそうです。

受付では、時として来館者から学問的な質問を受けることがあります。また、質問の内容によっては、どこまで答えてよいか迷うこともあるようです。これは、新人のＷさんやＳさんの悩みです。しかし、４名に共通している意見は、考古学的な質問については、専門の職員に連絡して対応してもらい、専門職がいない場合は、後日電話で問い合わせていただく、というものでした。いい加減なことは言ってはいけない、という自制心の故でしょうか。

ドングリコーナーをきれいにする

午前９時の開館前、最初に展示室の照明をつけ、体験コーナーの器具を整えるのは受付の人たちです。そして、来館者の立ち寄るスペースを清潔に保ち、来館者が快適に展示物に接するように案内する、受付の人たちが常に心がけていることです。午後５時の閉館後、遺失物（いしつぶつ）の有無を確認し、展示室を施錠してから消灯し、その日の日誌を提出します。

縄文土器パズルのパーツを元に戻す

このように、年中無休（年末年始および展示替えの数日を除く）の当センターの展示室および体験コーナーにあって、来館者に気持ちよくリピーターになっていただけるよう、受付の人たちは日々努力しています。

（福田敏一）

1/964

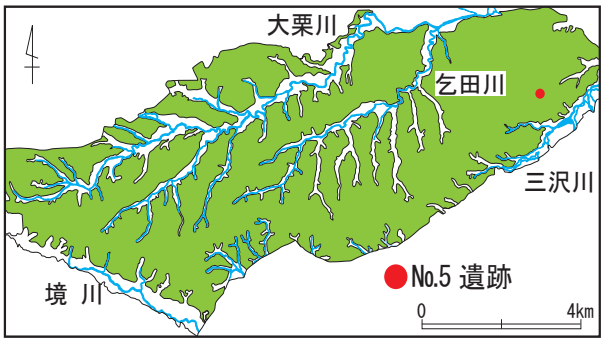
多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃22 多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.５遺跡

今回取り上げる遺跡は多摩ニュータウンNo.５遺跡です。場所は東京都稲城市坂浜にあるゴルフ場多摩カントリークラブのすぐ南にある谷です。ここから平安時代の竪穴住居跡が５軒と工房（こうぼう）跡が６棟見つかりました。竪穴住居跡は炊事をするカマドを壁に造り付けた竪穴式の構造で柱が２本のものと、ないものとがあります。屋内の広さは大体６畳から８畳くらいで、１LDKに一家族が暮らしていたのでしょう。

ここに住む人々の生活を支えていたのは、鉄の道具や武器を作る鍛冶（かじ）作業であったことが工房跡から出土した遺物から分かります。工房跡は二種類あり、ひとつはカマドを持つ住居を工房として使ったもので、壁際には床面から一段高くしたテラスがあり、そこから鉄滓（てっさい）と呼ばれる、鉄を溶かした際に出る不純物のかたまりが出土しています。また、床には大きな穴が掘られこの中からも鉄滓が出土しています。ここで生活しながら鍛冶も行っていたと考えられます。

もうひとつの工房跡は、四角の竪穴式の建物で壁際に柱を建て、家屋内を広く使う構造となっています。工房跡のひとつには床面に７条の浅い溝を掘っています。何のために掘られた溝か分かりませんが、想像を逞（たくま）しくすれば溝に材木を並べその上に板で床を張ったと考えられます。壁際の柱はすべてが建物の内側に傾いて立てられており、屋根を高くする工夫と思われますが、類例はありません。



多摩ニュータウンの遺跡

平安時代の鍛冶工房跡

工房跡やその周囲から鉄鏃が４点、鉄斧、刀子２点、糸を紡ぐ鉄製紡錘（ぼうすい）車、鉄釘12点が出土していることから、これらの鉄製品などを製作していたのでしょう。鉄の道具が作られていたのは平安時代前期の９世紀頃と考えています。

また、本遺跡からは縄文時代の集石（しゅうせき）が６基発見されています。集石はこぶし大の焼け石がまとまって出土する遺構で、石蒸（いしむ）し料理に使われていたのではないかと漠然（ばくぜん）と考えられています。この遺跡の調査がすべて終わった後に、はたして本当に石蒸し料理ができるかどうか試してみることにしました。イノシシやシカの肉は高くて手に入らないため、豚１頭の半身を買ってきて、黒曜石（こくようせき）の石器で切り分け、付近に生えている朴（ほお）の葉に包み、これを焼いた石を穴に敷き並べた上に置き、さらにその上に焼け石を積み、最後に土をかぶせ蒸し焼きにしました。

平安時代の住居跡

生焼けになって食べられないのではないかと思っていましたが、２時間後掘り起こすとなんと上手にできあがり、中まで火が通っているばかりか、柔らかく今まで食べたどの肉料理よりも美味しくいただきました。こうして集石遺構が石蒸し料理のための調理場であることに確信をもつことができました。

縄文時代の集石遺構

昔の人の活動を実際に行ってみることで追体験することを実験考古学といい、考古学のひとつの重要な研究分野となっています。なにごともヤッテみなければ分からない。　（川田壽文）

平成 26 年度企画展示解説 2

『古代びとの祈りとマツリ』《古墳時代》

今回は、平成 26 年度企画展示の中から「古墳時代」の内容について解説します。

古墳時代の展示内容は大きく３つに区分されます。「祈りの情景」、「河辺・山間のマツリ」、それと「王のマツリ」です。八角形ブースの一角には、今から約 1,600 年前の河辺の神マツリに関する復元展示をしました。これは、東京低地に所在する足立区の伊興遺跡をモデルとしたもので、ムラの巫女が河の氾濫や洪水を避けるために、カミに供物を捧げているシーンです。

注目していただきたいのは、土器のかたわらに植えた賢木（榊）です。昔から神域に植えるもので、枝にはたくさんの**「石製模造品」**と呼ばれる祭具が吊り下げてあります。これは、河の上を漂っているカミ様を降ろすための目印であり、神マツリには不可欠の道具です。

さて、石製模造品類には、鏡形、剣形、勾玉などを象ったものがありますが、これらを**「三種の神器」**と呼びます。もともとは、実物を木に吊り下げ、戦う意志が無いことを相手に伝えるためのものでした。実は、古代ヤマト王権が地方豪族たちを支配してゆく過程で、服属のあかしとして掲げられたものだったのです。後に、皇位継承の象徴として用いられるようになります。

伊興遺跡からの出土品の中で、最も注目できるのが、銅鏡と子持勾玉です。銅鏡は径８㎝の小型境（捩文鏡）です。鏡の裏面には、中央の紐を中心にして捩じり紐状の小文様が散りばめられた倭鏡で、近畿地方で作られたものと推定されます。

子持勾玉は、本体の前後左右に小形の突起物をつけた不思議な祭具です。よく見ると、蛾や蝶の幼虫の形にも似ています。原形が何だったのかは不明ですが、ヤマトの最も古い祭具のひとつであることは確かです。伊興遺跡では、供物を入れた土器や石製模造品等は神マツリを行った後、そのまま廃棄されていたようです（写真参照）。伊興遺跡から検出された夥しい祭祀遺物から、河辺に住む人々の自然に対する畏れや信仰の様子がうかがえます。

伊興遺跡の祭祀遺物の出土状況（足立区教育委員会提供）

同じようなマツリは、多摩丘陵の山間でも見られます。例えば、№243 遺跡では山から流れ出る川の中から、土師器とよばれる土器や土製品、木皿などが多く見つかっています。これらも、水の恵みを祈るために神に捧げられたものかもしれません。ただし、７世紀以降になると、祭具としての石製模造品は無くなり、土器や土製品が神マツリの主役となります。

古墳時代コーナーで、もうひとつ注目していただきたいのは、狛江市**土屋塚古墳**から見つかった円筒埴輪３点です。古墳は５世紀半ば頃に築かれた造出し付円墳で、直径が 35 mあまりです。かつては、100 基以上が存在したと推定される狛江古墳群のひとつで、多摩川中流域を支配した豪族が葬られています。円筒埴輪は墓の境域を示すとともに、葬られた首長の権力を誇示する役目を果たしていたと思われます。さらに、この埴輪の本体には方形の孔があけられていますが、これと同じ埴輪は群馬県太田市天神山古墳という、大きな古墳から検出された埴輪と共通する特徴を持っていました。もしかすると、５世紀の多摩川流域の首長と毛野（群馬）の首長とが、ヤマト王権に対抗するために、同盟関係をむすんでいたのかもしれません。古墳時代の政治や社会を考えるうえでも、重要な資料といえます。

古代国家の形成期において、神マツリの形態はしだいに統一されていきます。それは、王がクニを治めることが、まさに、「政」（マツリゴト）に通じていたからです。

（松崎元樹）

たまのよこやま 98　2014 年 9 月 30 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/